

2019 年度研究協力者の研究報告

研究課題：

- ①中国・新疆地域の造形作品にみる線描とエネルギー形象の研究
- ②8～11 世紀における木彫仏の調査研究－浄土宗寺院伝来像を中心として

氏 名（所属職名）：安藤 佳香（歴史学部教授）

1. 今年度の研究実績

- ① 新疆ウイグル自治区における政情不安定のため、現地調査は見送ったが、これまでの研究成果を整理し、反映させた『いのちのかたち－時空を超える唐草』（東方出版）を刊行した。本書における新疆ウイグル自治区に関連した仏教美術関連のエネルギー形象に関する新知見は以下のとおり。

- 1) ニヤ遺跡における蓮の^{うてな}台を突出させるタイプの蓮華化生表現の確認
- 2) ホータン・ダマゴウ遺跡におけるインド生まれのエネルギー形象・グプタ式唐草の盛行と日本の奈良時代への顕著な影響の確認
- 3) ホータン・ダンドンウイリク遺跡、ダマゴウ遺跡における、蓮を結節点とした、大地・水に対する基層信仰と仏教の融合の確認
- 4) クチャ・キジル石窟において盛行した、空間に小円をちりばめる独自のエネルギー形象の発見

- ② 日本国内において、以下の寺院の調査を実施し、一木彫像の実態把握に努めた。

兵庫県豊岡市温泉寺本尊十一面観音立像の詳細調査の実施

奈良時代にさかのぼる等身大の一木彫として極めて貴重な作例。三十三年ぶりの秘仏開帳の機に詳細調査を実施した。

三重県鳥羽市答志島、神島伝来の諸仏の調査

古代より朝廷ともゆかりが深く、海の交通の要衝であった離島地域の仏像の基礎調査を実施した。

佐賀県川古の大楠詳細調査の実施

樹齢三千年といわれる大クスに直接彫られていた伝観音菩薩立像の詳細調査と写真撮影を実施し、九州における仏教以前の霊木信仰と仏教の融合についての知見を得た。

2. 今後の研究実施計画

- ① 継続して新疆地域の造形作品にみられる線描とエネルギー形象を調査・研究し、その具体相、独自性を明らかにすることを目的とする。しかしながら引き続き新疆ウイグ

ル自治区における政情不安が予想されているため、状況によっては新疆関連の遺物を保存・研究しているイギリス大英博物館、V&A 美術館、フランス・ギメ美術館、ドイツ・ベルリンの国立博物館などを調査対象として研究を進めていきたい。

- ② 引き続き 8～11 世紀に制作されたと想定される古像の調査、研究を実施する。令和 2 年度は、昨年度基礎調査を実施した鳥羽に加えて、鳥取・島根県、京都市などを対象とする予定である。

研究課題：現代社会における宗教の戒律と生活倫理に関する実証研究

氏 名 (所属職名)：大谷 栄一 (社会学部教授)

1. 今年度の研究実績

2019 年度の研究実績として、大谷栄一編『ともに生きる仏教——お寺の社会活動最前線』(ちくま新書、2019 年)を刊行し、「はじめに」(1-20 頁)、「なぜ、お寺が社会活動を行うのか?」(21-47 頁)、「現代仏教を知るためのガイドブック」(238-249 頁)、「あとがき」(250-252 頁)を執筆した。

また、本書の内容に関連し、2019 年 4 月 6 日に大阪市天王寺区の應典院で開催された講座「日本仏教「臨床」の最前線!～ちくま新書新刊『ともに生きる仏教』発売記念～」に登壇するとともに、5 月 10 日に静岡市清水区の龍津寺で開催された現代宗教ワークショップ「仏教の今を考える」にも登壇し、「ともに生きる仏教——お寺の社会活動を考える」の講演を行った。いずれも一般聴衆を対象とし、仏教寺院の社会活動と社会倫理に関する成果を発信した。

また、2020 年 2 月 8 日に研究成果を発信するシンポジウム「現代日本の戒律と生活倫理」(本学宗教文化ミュージアム主催)を本学宗教文化ミュージアムで開催し、コーディネーターを務めた。

2. 今後の課題

自らの研究では現代日本仏教の社会倫理に着目した成果を公表したが、仏教者や仏教教団の社会倫理と生活倫理がどのように関連するのかについては、今後の課題である。

研究課題：浄土宗と戒律

氏 名 (所属職名)：齊藤 隆信 (仏教学部特別任用教員 (教授))

1. 今年度の研究実績

昨年度に引き続き、近世浄土宗における円頓戒の調査研究を行った。近世 300 年は浄土

宗において僧侶の生活上の頽廃が問題にされた時代であった。したがって、それを抑制すべく円頓戒がさかんに議論された時代でもあり、とりわけ増上寺の第 45 世成譽大玄（1680-1756）が大きな貢献をしている。

大玄には円頓戒や布薩戒に関わる数多くの著作が残されており、その最晩年の最終増訂版とも言える成果が『円戒啓蒙』と『円布顯正記』の二部である。しかし、これ以外にも未紹介の『円戒問答』や『円戒帰元鈔』の写本も現存しており、これらを成立順に比較することによって大玄の思想的な変遷や、時代状況までもが透けて見えてくるようである。

以上の円頓戒関連の写本は、近世浄土宗では宗派を代表する「触頭」を担っていた増上寺主として、全国の浄土宗僧侶に向けて発信した警鐘として読み解くことができるだろう。そこで、未紹介の『円戒問答』の写本をとりあげ、本学蔵本を底本として、大正大学蔵本、龍谷大学蔵本をもって校訂したテキストを作成するとともに、その解題の執筆に取り組んでいる。

2. 今後の研究実施計画

今年度の調査研究である近世の増上寺第 45 世成譽大玄によって著された『円戒問答』の校訂本とその解題を完成させる。

また円頓戒に関わるシンポジウムを令和 2 年度内に開催する。今から 1400 年前に創唱された円頓戒は、それまでの大乘仏教の戒を整理し表現し直した上で発信された戒である。それは仏教徒の生活指針そのものであるが、単に知識として戒の内容を知っているだけでは不十分で、これを実生活に活用することで真の意味での生活指針になる。その際に重要になってくるのは円頓戒の現代的で適切な表現方法、発信方法、実践方法である。したがって、シンポジウムにおいては円頓戒の教えと実践をどのように伝え生活の中に活用すれば良いのかということを話題の中心とする予定である。

以上の調査研究とシンポジウムの成果を『宗教文化ミュージアム紀要』において公表する。

研究課題：広沢池を中心とする平安京北西部郊外の歴史と文化に関する基礎的研究

氏 名（所属職名）：佐古 愛己（歴史学部准教授）

1. 今年度の研究実績

本年度は令和 3 年度に開催予定の講演会（「広沢」地域の歴史的特徴について（仮テーマ））に向けた基礎的な調査を開始した。

広沢池は風光明媚な場所として知られ、現在もお盆の灯籠流しや月見の名所として人々に親しまれているが、古くは平安時代から、和歌に詠まれたり、月見の地として文学作品

にも度々取り上げられてきた。なかでも「和歌」との関係が強いと思われ、国文学関係の史料に現れる「広沢」の地に関する記述を網羅的に蒐集・検討した。

勅撰集をはじめとする古代・中世の和歌にみられる「広沢(池)」や「千代の古道」を、『新編国歌大観』データベースなどを活用して検索し、必要に応じて図書館や国文学資料館等で、各歌集の和歌や、江戸中期に同地に居住した歌人望月長孝の歌集『広沢輯藻』などを蒐集した。今後、和歌が詠まれた背景などを分析するとともに、和歌だけではなく、そのほかの文学作品や歴史史料に描かれた「広沢池」「千代の古道」に関する史料調査を実施していきたいと思う。

2. 今後の研究実施計画

今年度に引き続き、広沢の地にかかわる、和歌や文学作品を調査するとともに、歴史史料の蒐集にも努めたいと考えている。特に令和2年度のミュージアム展示に関わって、冷泉家ご所蔵資料の調査に参加させていただき、令和3年度の講演会や展示と連携できる(できれば「広沢池」に関する)和歌や文学作品の調査を行いたいと思う。

また、和歌が詠まれた歴史的背景や景観の変化、さらに広沢池(平安京北部郊外)・千代の古道・遍照寺・児神社などと天皇・貴族との歴史的関係を、文献史料や絵画資料などを活用しながら調査を進める予定である。主として、図書館などの刊行史料や資料館等のデータベースから史料蒐集、研究を進める予定だが、京都府立京都学・歴史館、国文学研究資料館などでの史料調査を計画している。

研究課題：チベット仏教文化圏インド・ラダック地方の葬送儀礼にみる命

氏名(所属職名)：中島小乃美(保健医療技術学部准教授)

1. 今年度の研究実績

1) 現地調査

2019年8月に3日目のラダック調査を行う予定であったが、実父の容態が悪化し、調査を断念することになった。そのため特別展に向けて、現地の知人や友人に情報と写真データを提供していただいたが、研究内容まで踏み込むような情報を得られることはできず、十分な結果をえることができなかった。しかし、前年度までの調査の画像データおよび経典と註釈から、可能な限り行タントラおよび瑜伽タントラにおける「いのち」「寿命」という視点で考察を深め、加えて『悪趣清浄儀軌』から『チベット死者の書』に説かれる無量寿・無量光と馬頭との関係の一端を明らかにした。それについては、秋期特別展の図録に「チベットの宗教文化にみるいのち」として報告した。

2) 秋期特別展の企画・実施

本研究のテーマは、『チベット死者の書』に説かれる生と死の循環と、そこから解脱する方途としての信仰の姿に着目したことに始まる。生も死も越えることを表現するチベット密教芸術に究極的な美と祈りの姿をみることができるとともに、それはいのちの表現であり、救済の姿であることを伝えることをねらいとした。

展示テーマを基に、第一展示室は「美」を存分に感じられることと、古く貴重な作品を保護しつつ鑑賞できることを考慮した。できるだけ同じ尊格のタンカと尊像を展示することにより、2次元と3次元の表現を体験できるよう工夫した。

第二展示室は「祈り」をテーマとし、延命長寿、無病息災、除災招福などの民衆の祈りの対象となる尊格および医学図と、僧侶の祈りの姿として法具を展示した。そこに研究テーマである「いのち」を表現し、人々の暮らしと願いが織りなすいのちのありようを伝えることを意図した。またラダックの風景写真をパネルにして、現地の雰囲気を感じ取ることができるよう工夫をした。

ミュージアム入り口においてもグヒヤサマージャの立体マンダラを展示し、その制作過程の写真パネルや、マンダラの下絵、彩色図、砂絵マンダラの色砂、さらに尊像を並べ、チベット独特の砂絵マンダラと立体マンダラの二次元と三次元の表現をイメージしやすいよう工夫した。

期間中の週末は可能な限り会場に出向き、来館者に説明するようにした。日本に馴染みのある仏像とは異なることから戸惑いの声もあったが、大多数が時間をかけてじっくり鑑賞しておられた。この中で、「初めてチベット仏教を知った」、「仏教観が変わった」、「仏像がこんなに生き生きと訴えかけてくるのだということを初めて感じた」など、直接、感想を聞くことができたことはとても感慨深かった。また知人の勧めによって来館した人や、複数回来館された方も多かったことから、このような場を共有したことで、マンダラに説かれる諸々の仏方は、如来が衆生を思う愛によって空性から姿形を顕現されたと『大日経』に説かれていることの意味を、来館者の言葉から実感することができた。多くの人が自分自身にとってどうなのか、自心と仏と向き合い、その思いを語られたことが印象的であった。仏教美術を通してその美しさと、それを制作する人、守り伝えた人々の強い思いを感じることは、現代に生きる我々にも生きる力を与える。そのような仏教の力を確信することができた。

2. 今後の課題

現地調査のために、高僧から直接お話を伺えるよう手配をしていたのだが、2年にわたって夏季に海外の大学や宗教団体に招聘されておられ、『チベット死者の書』における無量光と無量寿の関係と修法の実際との確認を行うことができなかったことと、ラマユル地

域のゴンパの撮影ができなかったため、今後の課題として残った。経典解釈についても瑜伽タントラである『初会金剛頂経』の「遍調伏品」の註釈研究が必須であることを痛感している。

また一方で、現代のラダックに生きる人々の捉える生命観とチベット医学については、わずかに着手した程度であるため、今後、現地の人々と伝統医学の医師への聞き取り調査を進めていきたいと考えている。

研究課題：中国貨幣文化経済史の研究

氏名(所属職名)：宮澤 知之(歴史学部教授)

1. 今年度の研究実績

今年度私が取り組んだ中国経済史のテーマのうち貨幣に関係するものは五つあったが、今日まで形をなしたのは一つ、元末の権鈔銭に関するものである(紀要に投稿したもの)。ある程度形をなしたものが一つ、金朝の交鈔についてのものである。ただしこのテーマは長文を必要とするようになったので、現時点で未完成である。夏までには前半だけでも何とかしたい。

権鈔銭は歴史研究者が殆どとりあげたことのないテーマである。数篇の論文は貨幣収集家の手になるものであり、時代背景や元朝の紙幣制度とは無関係に論じている。私の研究は元朝の紙幣制度、1350年代という時代背景、明朝の幣制との連続性などの点から新しい解釈を行ったものである。

2. 今後の研究実施計画

現在、取り組んでいるテーマは金朝の交鈔である。交鈔とは金朝を代表する紙幣と言われているが、私の考証では紙幣でなく送金手形である。かつて世界最古の紙幣といわれた北宋の交子を扱い、紙幣でなく送金手形であると結論づけた。貨幣とは何かというとき機能から定義しなければならないというのが私の立場であり、貨幣機能をもたない交子は紙幣でなくなるのである(商品が買えない-流通手段でない、税金で納入できない-支払手段でない、貯金できない-財産の保全手段でない、商品の価格を表示できない-価格表示機能がない)。同じ手法で金朝の交鈔をみると、発行後50-60年間は北宋の交子と同じく送金手形、その後30年間は紙幣という見通しが立てられた。私の定義に従えば金朝貨幣史はすべて書き換える必要がある。これが長大な論文になる原因であり、現在は金朝貨幣史の前半、交鈔が紙幣でなかったころの貨幣史を扱っているところである。そのあと交鈔が紙幣化したときの貨幣史を書きたいと思っている。

研究課題：現代日本の民俗信仰と民俗芸能をめぐる調査研究

氏 名（所属職名）：八木 透（歴史学部教授）

1. 今年度の研究実績

- ・岩手県花巻市大迫町岳・大迫・遠野市における神楽の調査研究

日 時：2019 年 9 月 10 日（火）～2019 年 9 月 12 日（木）

岩手県花巻市大迫町の岳集落および大迫集落において、早池峰神楽に関する資料調査を行うとともに、神楽衆に対して、今日的課題や今後の展望、後継者問題などについて聞き書き調査を行った。また同じ早池峰系大償神楽に関しても、神楽衆に同様の聞き書き調査を実施した。さらに遠野市において、地元神楽に関する資料調査を行った。

- ・山形県米沢市における民俗芸能と絵画資料に関する調査研究

日 時：2020 年 1 月 18 日（土）～2020 年 1 月 19 日（日）

山形県米沢周辺地域において、獅子踊りと神楽に関する民俗調査を行うとともに、米沢市上杉博物館において、地元の民俗芸能、および当館所蔵の国宝「上杉本洛中洛外図屏風」に関する資料調査を行った。また当館学芸員と今後の研究計画について話し合った。

- ・京都府福知山市三和町大原神社における追儺儀礼の調査研究

日 時：2020 年 2 月 2 日（日）～2020 年 2 月 4 日（火）

三和町大原神社で行われる、節分追儺儀礼の民俗調査を行った。大原神社では、昔は節分の深夜 0 時に目に見えない鬼たちが本殿に入り、神の呪力によって善良な存在へと改心して、その後村へ出て村人たちに福を授けたと伝えられている。そのことから、今日でも豆まきでは「鬼は内、福は外」と唱えているという。このような追儺儀礼のすべてを、参与観察および聞き書き調査を行い、また写真撮影を行った。

2. 今後の研究実施計画

・昨年度に引き続き、東北地方、特に岩手県の神楽および念仏踊りの調査を実施し、ミュージアムでの上映会あるいはシアター公演の実現に向けて検討してゆく。かつてからシアター公演の候補とされながら、まだ実現できていない北上の「鬼剣舞」の公演に向けて、具体的な策を講じてゆくつもりである。

・これまでのほぼ毎年の恒例となっている、京都と周辺地域の六斎念仏、および大念仏狂言のシアター公演の実施に向けて、調査を継続的に行なってゆく予定である。特に、福井県小浜市和久里に伝わる「和久里壬生大念仏狂言」は、京都の大念仏狂言が他地域へ伝わって定着している唯一の事例であり、今後は和久里壬生狂言を招聘してのシアター公演の実施に向けて、具体的な策を模索してゆくつもりである。

・伊豆諸島南部の八丈島への調査を計画している。八丈島にはかつて流人が伝えたとされ

る年中行事や芸能が数多く残っている。特に島特有の盆行事や死者祭祀の様子は、民俗学的にも注目に値するものがある。将来的にシアターでの上映会の可能性を探ってゆきたいと考えている。